

令和 2 年 6 月 12 日現在

機関番号：13801

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2016～2019

課題番号：16K13523

研究課題名（和文）リスクコミュニケーションによる教員／児童生徒／保護者の協働で学校リスクを低減する

研究課題名（英文）Reducing school risks by collaborating with teachers/students/guardians through risk communication

研究代表者

村越 真（Murakoshi, Shin）

静岡大学・教育学部・教授

研究者番号：30210032

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,600,000円

研究成果の概要（和文）：学校危機の実態と保護者、児童生徒とのリスク情報共有の実態をヒアリングにより把握したことを踏まえて、2つの実証的研究を行った。特別活動を素材としたリスクコミュニケーション（RC）課題を実施し、その効果をリスクやRCへの意識という観点から把握した。同じく、保護者・生徒への説明会というロールプレイ課題と説明文書作成の課題によるRC課題の効果を比較した。この研究より、RCによりリスク忌避の低減とともに、保護者や生徒、地域とリスクを共有し協働することの必要性や教員の責任についての気づきが学生に得られた。これらの成果を、学校での防災や資源枯渇を題材としたジレンマ解決型授業や教員研修の実践に活用した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

様々なリスクに囲まれる学校でRCはますます重要なアプローチになると予想される。本研究の成果は、学校におけるRCの意義を明らかにすると同時に、教員養成でその資質を伸ばすことの可能性や意義を明らかにした点にある。多様化し成熟する社会において、他者と協働して課題を解決する能力の育成が新学習指導要領で謳われている。これらの課題解決では、時にジレンマをもたらす様々な論点を統合的に考え、目的を再構成することが欠かせない。RC課題が、学校や大学でこうした能力を育成、発揮する教材として可能性を持つことを明らかにした点も、本研究のより広い意義である。

研究成果の概要（英文）：Two empirical studies were conducted based on the actual situation of the school crisis and sharing risk information with parents and students grasped by hearings. (1) We conducted risk communication (RC) tasks using Special activities as the material, and investigated the effects from the perspective of risk and RC awareness. (2) Similarly, the effects of the RC tasks was compared between role-play and making explanatory documents for parents and students. From the researches of (1) and (2), it was revealed that RC reduced risk aversion, and at the same time, increased need to share risks and cooperate with parents, students, and the community, and increased awareness of teacher responsibilities for protecting student from risks for students. These results were utilized in the practice of dilemma-solving classes on the subject of disaster prevention and resource depletion in schools and teacher training.

研究分野：リスク認知

キーワード：教員養成 防災 ステークホルダー ロールプレイ 特別活動論 ジレンマ SDGs

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

交通事故や災害リスクに関して、学校は一定の成果を上げているが、負傷の大部分を占める生活安全領域では、傷害発生件数が 113 万件発生し 30 年前と比較し約 3 割増であることや死亡事故も依然 74 件存在することが課題視されている(中央教育審議会、2012)。加えて、いじめから派生する重大事態、ネットによるリスクなど新たに多様なリスクが学校を取り巻き、多忙化や教員の疲弊の一因ともなっている。

これらの学校リスクに関して、以下の課題が指摘できる。第一に児童・生徒の主体性である。リスクを「自分のこと化」し、主体的に取り組む点には、旧来の教育手法に限界がある。第二に、教育的価値によるリスクの見逃し(内田、2015)がある反面、「ケガが出たから××を止める」のようにリスクを短絡的に避けるアンバランスが、体験的活動に見られる。リスクと教育効果のジレンマを乗り越えるためには、多様な視点からのリスク吟味が欠かせない。

本研究では、学校におけるリスク対応の課題に対して、リスクコミュニケーション(以下 RC)の考え方が有効だと考えた。RC とは、「リスクの適切なマネジメントのために、社会の各層が対話・共考・協働を通じて、多様な情報及び見方の共有を図る活動を通してステークホルダー間の権限と責任の分配が定まるプロセス(安全・安心科学技術及び社会連携委員会、2014)である。

2. 研究の目的

RC の考え方を学校教育に導入することで、児童生徒、保護者のリスクに対するリテラシーを高め、リスクに対して主体的に取り組む文化形成への基盤を生み出すとともに、教員/児童生徒/保護者が学校リスクに対して協働することの可能性や課題を探る。これにより、学校リスクの低減を図るとともに、21 世紀型能力育成の契機や学校に関わる合意形成や学校と保護者間の信頼の醸成の機会として寄与する。

3. 研究の方法

(1) 管理職を対象とする学校リスクとその課題の洗い出し

附属学校の管理職を対象とした予備的ヒアリングによって、学校危機の実態、保護者や児童生徒とのリスク情報共有の実態について把握した。

(2) 模擬シナリオとロールプレイを使った RC 演習の効果検証

教員養成課程における特別活動論の授業を利用し、体験的活動における事故発生シナリオを使って、RC を行うロールプレイ課題を中心とするグループワークを実施した。

研究 1 は 2017 年～2018 年度に行われた。同内容の授業を行う 5 つのクラス(いずれも 100～120 人)に対して、RC のグループワークを実施した。9 項目からなる質問紙によってリスクや RC への態度の事前調査を実施し、2 回目の RC の授業の後に事後調査を実施した。質問紙の内容は、概ね「リスクの挑戦的意義」「リスク情報の共有」「リスク忌避」に関する項目からなる(表 1)。シナリオはいずれも学校教育で起こった具体的な事例であり、事故が起こった後に同様の活動を実施するかどうかをテーマとして、それを学校、保護者、生徒の 3 者で議論して意思決定することを求めた。その際、ジグソー学習法(東京大学 CoREF、no date)を援用したエキスパート活動で、割り振られた学校(教員)、保護者、生徒、の立場を掘り下げて理解した。自由記述は、テキストマイニングの手法を使い、単語の頻度と共起を検討するとともに、RC の目的の視点からコード化し検討した。

研究 2 は 2019 年に行われ、同様のパラダイムで授業を行ったクラスと遠足のしおりを作成することでリスクを生徒・保護者に伝える課題を行ったクラスで効果を比較した。

(3) RC の実践

RC の考え方を援用した授業や教員研修を実践し、その効果を検討した。具体的には、公立中学校での災害時のジレンマを課題とした道徳の授業、附属小学校における「南海トラフ地震臨時情報」を題材として、ロールプレイにより防災対応を考えることで多面的な思考を促す RC 型の実践、附属中学校において、地域資源の枯渇を題材としてステークホルダーの可視化やローカルな問題とグローバルな問題の連続性への気づきを得る対話型実践、を行った。また、研究の成果を基に、学校リスクに関わる専門職や地域での教育に携わる教員らの養成・研修において、学校リスクの低減を図る内容を提供した。

4. 研究成果

(1) RC の効果の実証研究

9 つの質問項目は 3～4 クラスに分けられた。再現性のあるクラスは、「リスクの挑戦的意義」「リスク情報の共有」「リスク忌避」であった(表 1)。重要な知見として、「リスクの挑戦的意義」クラス得点は、全てのクラスで事前事後の有意差が見られなかったが、「リスク忌避」は全てのクラスで有意差が見られ、リスク忌避傾向が事後で減少した。また「リスク情報の共有」はクラス 3、4 とクラス 2 で見られ、いずれも増加した(表 2)。自由記述では、「合意の難しさ」「異なる意見の存在やそこからの学び」「リスクコミュニケーションの重要性」「リスクへの理解・意義」「協働・地域の協力」などとともに、「否定的な気づき」も見られた(表 3)。テキストマイニングによる単語の頻度では、「理解」や「納得」といったリスクを伝えあう必要性や、その難しさに言及したと思われる「難しい」といった単語の頻度が多かった。

表1: リスクとその共有に関する質問項目と得られたクラス

	クラス1	クラス2	クラス3, 4	クラス5
C1: リスクの挑戦的意義	Q4. リスクはあっても、新しいことにチャレンジする機会を与えたい Q5. ある程度のリスクに関する経験がないと子どものリスク対応能力が育たない Q6. 何がリスクなのかを理解するためには、子ども自身のリスク経験が必要である	Q4. リスクはあっても、新しいことにチャレンジする機会を与えたい Q5. ある程度のリスクに関する経験がないと子どものリスク対応能力が育たない Q6. 何がリスクなのかを理解するためには、子ども自身のリスク経験が必要である	Q4. リスクはあっても、新しいことにチャレンジする機会を与えたい Q5. リスクに関する経験がないと子どものリスク対応能力が育たない Q7. 子どもや保護者に活動のリスクを伝えると不安になる懸念がある	Q4. リスクはあっても、新しいことにチャレンジする機会を与えたい Q5. リスクに関する経験がないと子どものリスク対応能力が育たない Q6. 何がリスクなのかを理解するためには、子ども自身のリスク経験が必要である
C2: リスク情報の共有の重要性	Q7. 子どもや保護者とリスクについて情報を共有することが大事だ Q8. リスクがある活動をする前には、児童生徒や保護者に納得してもらうことが大事だ Q9. 教員だけでなく、保護者や児童生徒もリスクに対して責任を持ってもらうことが必要だ	Q7. 結果的に活動をやらないことになって、リスクについて情報を保護者児童と共有することが大事だ。 Q8. 児童生徒や保護者に学校活動のリスクを納得してもらうことが学校運営には不可欠だ。 Q9. 今の学校教育では保護者や児童生徒もリスクに対して責任を持ってもらうことが欠かせない。	Q8. リスクがある活動をする前には、児童生徒や保護者に納得してもらうことが大事だ。 Q9. 保護者が活動のリスクを承知した上で子どもを参加させることが望ましいと思う。	Q8. リスクがある活動をする時には、児童生徒や保護者の立場に立って考えることも必要だ。 Q9. リスクがある活動をする前には、児童生徒や保護者に納得してもらうことが大事だ。
C3: リスク忌避	Q1. 学校は児童・生徒の安全・安心を確保し、健全に教育を受けられる場所であるべきで、リスクがあってはならない Q2. 子どもたちが成長するために必要なことであってもリスクは避けるべきである Q3. 学校教育において、リスクは必要である	Q1. 学校は児童・生徒の安全・安心を確保し、健全に教育を受けられる場所であるべきで、リスクがあってはならない Q2. 子どもたちが成長するために必要なことであってもリスクは避けるべきである Q3. 学校教育において、リスクは必要である	Q1. 学校は児童・生徒の安全・安心を確保し、健全に教育を受けられる場所であるべきで、リスクがあってはならない Q2. 子どもたちが成長するために必要なことであってもリスクは避けるべきである Q3. 学校教育において、リスクは必要である	Q1. 学校は児童・生徒の安全・安心を確保し、健全に教育を受けられる場所であるべきで、リスクがあってはならない Q2. 子どもたちが成長するために必要なことであってもリスクは避けるべきである Q3. 学校教育において、リスクは必要である Q7. 子どもや保護者に活動のリスクを伝えると不安になる懸念がある
C4:			Q6. 何がリスクなのかを理解するためには、子ども自身のリスク経験が必要である	

表2: 各クラスのクラスタ得点と分散分析の結果

クラス	クラスター	項目数	前		後		前後の主効果	有意水準
			平均	SD	平均	SD		
クラス1	挑戦的意義	3	12.35	2.06	12.00	2.14	F(1,67)=1.321	ns
	共有の重要性	3	13.40	1.71	13.59	1.90	F(1,67)=0.557	ns
	リスク忌避	3	8.49	2.39	7.01	2.12	F(1,68)=23.888	p<0.001
クラス2	挑戦的意義	3	11.90	2.27	11.87	2.21	F(1,48)=0.009	ns
	共有の重要性	3	12.65	2.19	13.42	2.20	F(1,51)=10.976	p<0.01
	リスク忌避	3	8.39	2.15	7.39	2.44	F(1,50)=17.995	p<0.001
クラス3, 4	挑戦的意義	3	11.84	1.71	11.54	1.62	F(1,132)=2.749	ns
	共有の重要性	2	9.09	1.43	9.51	1.06	F(1,132)=8.867	p<0.01
	リスク忌避	3	9.05	2.24	8.10	2.47	F(1,132)=23.183	p<0.001
クラス5	リスク経験	1	3.87	0.89	3.83	0.75	F(1,133)=0.168	ns
	挑戦的意義	3	11.98	2.29	11.73	2.13	F(1,80)=0.769	ns
	共有の重要性	2	9.21	1.46	9.12	1.64	F(1,83)=0.375	ns
	リスク忌避	4	12.52	2.52	10.67	2.27	F(1,82)=36.231	p<0.001

表3: 主要な自由記述

合意の難しさ

今回は保護者を担当したが保護者の中でも板取村に行く、行かないの意見が分かれる中で、学校、生徒、保護者の意見をまとめることは更に大変だと感じた。三者全員が理解することはきわめて難しいことだと思う

異なる意見の存在やそこからの学び

話し合えど話し合えど正解を見つけることはできなかった。しかし話し合うことでお互いの考えをある程度理解することはできた。答えを出すこともそうだが、意見を交わすことに意味があるとわかった。

自分では納得できる意見だと思っても、他の人は納得できないこともあると思った。反対意見を聞くことで、考えが深まるのがわかった。

リスクコミュニケーションの重要性

そしてリスクはどういうときでも存在するので、リスクについての共有、対策を保護者、学校、子どもでみんなで考えるべきだと思った。おののおで考え、決断するよりも、話し合いをするなどをしてリスクを最優先に考え、安全を第一に考えられるようにしたい。

多少のリスクはあるけれどそのリスクをきちんと説明した上で活動をする必要があると考えます。何もなく終えることが一番だけど、リスクを体験しておくことで将来何が起きたときにも対応できるのではないかと思います。それぞれの立場で考えると不安もあるし、楽しみなどもあると思います。その不安や楽しみといった思いや、危険な部分の情報を共有することが重要だと感じました。

リスクへの理解・意義

教育活動として、多少のリスクを負うことは必要だと学んだ。危険をすべて回避してしまうと、ナイフやカッターも使えない、危険なとき自分の身を守ることができない子どもが育ってしまう。特別活動でも子どもにそういった生きるための強い力を身につけさせることが大切な部分だと気づいた。

リスクについて考えると、活動を制限される可能性がある一方で、実際に事故が起きてしまうと責任問題となり、他の学校の行事にも影響が出てしまうことを知った。

協働・地域の協力

その現場で落石事故があったことを先に生徒たちに説明しておく。そうすることで現場での行動も変化するし、意見も通りやすい(いざという時の)。自分たちで正しい行動を選択できるようにもなる。

リスクコミュニケーションをするのだから、生徒も自分たちのために多くの大人が動いてくれていることを理解し、ちゃんと考えるべきだと思った。学校は保護者の協力なしでは成り立たない。考えられるリスクは伝えた上で一緒に対策を考えるべきだと知った。

地域が学校へ求めているニーズが大きく限界があるように感じるので、保護者や地域が学校へ支援をしていくことが大切になってくるのではないかと学んだ。

否定的な気づき

生徒から、あまり意見を言うことは少なく、結局学校と保護者が決定したことを、甘んじて受け入れるしかない。

色々な意見があるが、結局は学校にすべての決定権があることがよくわかった。

賛成派が多く、先生の対応の変化、落石防止策があればOKという考えだった。反対派のわたしは、とても意見が言いにくく、まるで良くない意見を押し付けている気分だった。しかし、親身に聴く姿勢を見せてくれる職員はすばらしいと感じた。

反対派の保護者=過激派なモンスターペアレントとして、全員が考えているようだった。その立場になってみると、まるで悪者になったかのような感じだった。子どものために思い反対しているほうなのに、と思った。

責任

教師は見えないところで生徒の安全へと働いていた(下見など)。子どもの命がかかっているため、妥協は許されない。

リスクへの態度の変容
 以上のことから、RCを通して、リスクがある活動のメリットやそれを排除することのデメリットに気付けたこと、それによりリスクへの忌避的態度の減少につながったと考えられる。

RCへの肯定的態度

「リスク情報の共有」の事前調査の1項目あたりの平均値は4.5と、著しく高かったにも関わらず、5クラス中3クラスで有意に得点が向上した。自由記述からも、表面的な意義だけでなく、「学校としての立場でしたが、親の子どもに対する愛情と、リスクへの納得の両立はとても難しいことである・・・練習風景を親になんらかの形で共有するなど、常に親と良い関係を築くことが大切になると感じた（組体操課題）」、「感じ方をお互いに知ることで対処法を新しく考えることができたり安心感が増したりするのでコミュニケーションの価値は大きい」といった、異なる意見の存在への考えが深まる記述が見られた。また、「それぞれの主張は正しくて、だからこそ本当にむずかしい問題だと感じました。・・・学校が全てを背負うのは大変だし無理な話なので、保護者や児童にも意見を求めて考えを1つにした上で、やらせる、やらされることのないようにすべきだと思います。」といった、リスクについて協働すべきという認識への気づきも見られた。

教員養成課程での意義

RCを通じて、教育職員としての使命感や責任意識につながる気づきが、少数ではあるが生まれた。その内容は、「子どもの命がかかっているため、妥協は許されない。」「最後は学校側が総合的に判断することになると思うので、責任を感じるなと思います。」「実際に事故が起きてしまうと責任問題となり、他の学校の行事にも影響が出てしまうことを知った。」「私は、学校側として組み体操を継続することを主張したが、“リスク”を負ってまで組み体操をするのか、本当に『一体感』や『達成感』というのは組み体操でなければ得られないのか、集団行動でいいのではないかなど意見が来て、“リスク”の通じて得られるものの大切さを語ることができず保護者会で中止の方向に向かってしまった。なぜ、リスクを負うことが大切なのか、しっかりと意見を持っていないと、保護者側の意見に反論できないと思った。」といったものであった。同様の気づきは、2019年度の研究2でも見られた。

リスクに関する学校の限界と、子どもや保護者と責任を分担することの重要性への気づき

「教師ばかりが責任を問われるのは当たり前だと思わないでほしいと感じた。リスクがあることはきっと楽しいと感じるがそのリスクが何を生むのかを子どもも考えなければならない。」「地域が学校へ求めているニーズが大きく限界があるように感じるので、保護者や地域が学校へ支援をしていくことが大切になってくるのではないかと学んだ。」といった、これまで当たり前のように感じていた教員の責任への疑問や、現実社会の様々な要請の中で、過剰な責任を負わされる学校教員としての重要な気づきが得られた。また、生徒が主体的に関与できない現状への気づきも得られた。

異なる課題との効果の比較

2019年度の研究では、事前事後の質問紙によるリスクへの態度の変容や情報共有への好意的態度への変容は再現されなかった。一方で、自由記述の頻度分析とテキストマイニングの結果からも(表4)、遠足のしおりや保護者会で伝える演習を行った対照群では、リスクやそれに伴う義務に意識が向くと同時に、伝えることや活動の意義が焦点化され、また、下見や協力といった比較的具体的な遠足の状況にも意識が向いていた。一方ロールプレイによるRCを行った実験群では、保護者・生徒と対峙するRC場面を通して、保護者やその気持ちに意識が向き、事故発生があった地域への遠足に対して保護者からの納得を得ることの困難さに意識が向いていた。RCの難しさが、リスク忌避の傾向と相俟って挑戦的意義や情報共有についての態度の変容に結びつかなかったと思われる。さらに、実験群では、学校、生徒は授業後にリスク忌避が低下したが、

表4: 特徴語と両群での出現率

特徴語	出現率			
	対照群	実験群	有意確率	
対照群の特徴語				
リスク	.592	0.93	0.62	***
伝える	.414	0.51	0.24	***
教員	.376	0.56	0.52	ns
考える	.362			
大切	.322			
対応	.317			
必要	.289			
意義	.260	0.27	0.06	***
活動	.258			
遠足	.221			
実験群の特徴語				
保護者	.478	0.73	0.85	*
児童等	.381	0.41	0.30	ns
意見	.308			
事故	.281			
立場	.267			
納得	.232	0.06	0.25	***
体験活動	.228	0.27	0.29	ns
学校	.221			
難しい	.211	0.08	0.24	***
思う	.204			
その他の頻出語				
責任	-	0.08	0.10	ns
不安	-	0.10	0.10	ns
下見	-	0.15	0.01	**
目的	-	0.13	0.01	**
協力	-	0.11	0.02	*
リスクマネジメント	-	0.07	0.08	ns
気持ち	-	0.01	0.11	***
義務	-	0.09	0.00	***
納得×難し	-	0.00	0.07	*
安全	-	0.19	0.19	ns
理解	-	0.11	0.18	ns
対策	-	0.18	0.15	ns

保護者はリスク忌避が上がっていた。自由記述の中にも、保護者の不安や心配を記載したものは比較的多く見られた。

(2) 実践の成果

授業実践は、地元メディアにも取り上げられるとともに、国際学会においても発表された。RC型の授業実践によって、普段気づきにくい災害時のリスクへの気づきや意思決定の難しさへの気づきが得られた。また地元の資源枯渇に関する授業では、地元のサクラエビの不漁というローカルな問題が持続可能性というグローバルな問題につながることへの気づきが得られた。さらに、教員研修の一部は道徳教科書の指導書作成にも生かされた。

<引用文献>

- 1)安全・安心科学技術及び社会連携委員会(2014)RCの推進方策について(報告).安全・安心科学技術及び社会連携委員会.
(http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/gijyutu/gijyutu2/064/houkoku/_icsFiles/afieldfile/2014/04/25/1347292_1.pdf)
- 2)河合美保・村越真・鈴木秀志・羽田秀樹(投稿中)小中学校教員における学校でのリスク経験の必要性に関する意識.
- 3)村越真(2006)自然体験における意志決定と危機管理.静岡大学教育学部附属教育実践総合センター紀要, No.12, 165-174.
- 4)村越真(2017a)安全教育の課題と21世紀型能力.教科開発学論集, 5, 117-126.
- 5)村越真(2017b)「リスク科の構想:21世紀型能力を踏まえたマネジメント教育」教科開発学を創る 第1集, Pp.125-146.愛知教育大学出版会.
- 6)National Research Council(編)林裕造・関沢純(監訳)RC:前進への提言.化学工業日報社.
- 7)東京大学 CoREF (no date) 知識構成型ジグソー法.(http://coref.u-tokyo.ac.jp/a_リスクコミュニケーション_hives/5515).
- 8)内田良(2015)教育という病:子どもと先生を苦しめる「教育リスク」.光文社.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計11件（うち査読付論文 9件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 8件）

1. 著者名 中村美智太郎	4. 巻 69
2. 論文標題 連帯可能性としてのリスク・コミュニティへの視座--再帰的近代化と道徳のリスクの問題	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 静岡大学教育学部研究報告（人文・社会・自然科学篇）	6. 最初と最後の頁 149-161
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.14945/00026224	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 藤井基貴	4. 巻 Feb-39
2. 論文標題 『考え、議論する道徳』への構造転換 スポーツを題材とした『アスリート道徳』の授業開発	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 心理学	6. 最初と最後の頁 33-43
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20789/jraps.39.2_33	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 藤井基貴	4. 巻 337
2. 論文標題 『現代的な課題』を取り上げた道徳科の教材・授業開発 防災を題材とした『主体的・対話的で深い学び』の実践	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 道徳と教育	6. 最初と最後の頁 109 - 120
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 満下健太・村越真	4. 巻 28
2. 論文標題 三相因子分析による大学生の小学校の体育的活動に対するリスク認知分析	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 リスク研究学会誌	6. 最初と最後の頁 13-21
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.11447/sraj.28.13	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 村越真・河合美保	4. 巻 8
2. 論文標題 リスクコミュニケーションによるリスクとその共有に対する態度の変容	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 教科開発学論集	6. 最初と最後の頁 1-10
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 村越真・河合美保・鈴木秀志・羽田秀樹	4. 巻 18
2. 論文標題 安全教育の実施状況とその規程因としての教員の属性：静岡県西部2市の義務教育教員を対象として	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 安全教育学研究	6. 最初と最後の頁 37-49
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中村美智太郎・鎌塚優子・上野博史	4. 巻 28
2. 論文標題 道徳教育における現代的課題に対応したケース開発と実践の検討	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 静岡大学教育実践総合センター	6. 最初と最後の頁 39-47
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) doi/10.14945/00024658	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 村越真	4. 巻 5
2. 論文標題 安全教育の課題と21世紀型能力	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 教科開発学論集	6. 最初と最後の頁 117-126
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 藤井基貴、川原崎知洋	4. 巻 26
2. 論文標題 防災教育のための絵本教材の開発	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 静岡大学教育実践総合センター紀要	6. 最初と最後の頁 233-240
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 藤井基貴	4. 巻 704
2. 論文標題 防災教育	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 道德教育	6. 最初と最後の頁 12
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 村越真・河合美保	4. 巻 8
2. 論文標題 教職課程におけるリスクコミュニケーション演習の効果とリスクへの態度の変容	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 教科開発学論集	6. 最初と最後の頁 1-6
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件 (うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 中村美智太郎
2. 発表標題 道德教育の現状と課題--『教科化』時代を迎えて
3. 学会等名 静岡大学教育学部同窓会小笠支部総会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 中村美智太郎
2. 発表標題 新学習指導要領における道徳教育の方向性と評価の問題について
3. 学会等名 職員組合・特別分科会「特別の教科 道徳」研修会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 藤井基貴
2. 発表標題 防災教育
3. 学会等名 越境地域政策研究フォーラム（招待講演）
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 中村美智太郎・鎌塚優子・竹内伸一・岡田加奈子共編著	4. 発行年 2018年
2. 出版社 学事出版	5. 総ページ数 127
3. 書名 とことん考え話し合う道徳--ケースメソッド教育実践入門	

1. 著者名 中井仁・藤井基貴他（36名）	4. 発行年 2018年
2. 出版社 京都大学学術出版会	5. 総ページ数 586
3. 書名 教育現場の防災読本	

1. 著者名 村越真・井村仁・大石康彦・金子和正・永吉宏英・星野敏男・小森伸一・土方圭・高野孝子・張本文昭・西島大祐・松本秀夫・千足耕一・島貫織江他	4. 発行年 2018年
2. 出版社 杏林書院	5. 総ページ数 246
3. 書名 野外教育学研究法	

1. 著者名 村越真	4. 発行年 2017年
2. 出版社 愛知教育大学出版会	5. 総ページ数 164 (分担当125-146)
3. 書名 リスク科の構想：21世紀型能力を踏まえたマネジメント教育（教科開発学を創る 第1集）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	中村 美智太郎 (Nakamura Michitaro) (20725189)	静岡大学・教育学部・准教授 (13801)	
研究分担者	中道 圭人 (Nakamichi Keito) (70454303)	千葉大学・教育学部・准教授 (12501)	
研究分担者	藤井 基貴 (Fujii Motoki) (80512532)	静岡大学・教育学部・准教授 (13801)	